希望を与えてくれた若者たちの物語

自費で東北被災地取材を開始してから３年が経過したが、コミュニティ再生に奔走する若者たちを紹介したい。

エピソード　1.
一般社団法人 re:terra 代表の渡邉さやか。

3.11東日本大震災までは、東京のコンサルタント会社に勤務。被災地を回るうちに学生のころ生活したカンボジアの人々と、被災地の人々を重ね合わせるようになる。そして支援される事に慣れ受身になりがちな人間性を見抜き、持続可能なビジネスを地元の人と一緒に作りあげる「ローカル・ビジネス」の仕組みを生み出した。

陸前高田市で気仙椿の実を、化粧品会社とタイアップしハンドクリームやリップクリームに作りあげ、女医会の協力で販売開始し、現在はカンボジアで、女性起業家の美容事業パートナーとして事業を開始。

カナディアン・アカデミー・セタガヤは、核家族、少子高齢化、団塊の世代をキーワードに孫と留学の実践を開始し、この結果をサンリオのＮＰＯハロードリームに提示し、３世代家族プロジェクト・Smile Cloverが発足した。

地域の人々が集めた［気仙椿の種］から、気仙地域の自然と産業を礎としたビジネスを創出し、未来の子供たちに繋げる３世代のプロジェクトを立ち上げた渡邉さやかを、これからも後方支援したい。

エピソード　2.
一般社団法人つむぎや代表の友廣裕一。

大学卒業後、日本一周の旅で７０以上の農山漁村を訪ね、ローカルの仕事と暮らしを体感。

3.11東日本大震災の後、宮城県石巻市の牡鹿半島を中心に、地域の未使用資源の製品化、企画・販売までを展開中。

具体的には、鹿の角を使ったアクセサリー［OCICA］や、漁網を使ったミサンガなどをプロのデザイナーの協力を得て、海外にも販売活路を見出している。既にバルセロナ、ポートランド、ホノルル、カナダなどで高いデザイン性が認められ勇気づけになった、と喜々として語る。

被災地の人々が集うコミュニティハウス建設のため奔走中だが、豊かな海産物を活かした飲食店経営や、海産物加工販売をツールに地域文化の発信拠点として、地域コミュニティを再生したい、と人懐っこい顔で語る。

エピソード　3.
一般社団法人リディラバ代表の安部敏樹。

東京大学の学生だった２００９年に設立。「社会の無関心の打破」をミッションに掲げ、［世の中の個別の問題を解決する以上に、社会の人々の意識を高めることが根本的解決に近づく］という考えで、多岐の分野において社会的に十分に認知されていない問題を取り上げたスタディツアーを展開中。

リディラバはridiculous things loverから作られた造語。「面白い」［バカバカしい］という要素があって初めて継続性、爆発性のある社会変革になるという考えからネーミング。

3.11東日本大震災のあとは、被災地復興支援ツアーを宮城県石巻市の現地看護師研修、地域医療ツアー、更に「農作物の流通」農業ツアーと幅広いスタディツアーを展開。

メディアで報じられるような「社会問題」だけでなく、誰かがふとした瞬間に持つ違和感こそが「社会問題の芽」だと思う。リディラバは「問題意識発信のプラットフォーム」となることで誰もが社会の当事者としての問題意識を持ち、問題意識を共有し主体的にアクションを起こせる環境を提供したい、と爽やかに語る。

単身バンクーバ

金丸蓮

成田空港でチェクインが数分で済んだためか、飛行機に乗ることは簡単なことだなと、何となく直感した自分がいた。チェックを受け一階下の階段を下りて、出国検査を通り搭乗ゲートへと足が急いだ。ゲートまでが長く、ゲートの窓から見える飛行機や景色、見えてくるものが全て偉大にみえた。そしてまた、その偉大さへと近づく自分がカッコよく思えた。搭乗ゲートに着くと、沢山の人がベンチに腰かけていて、自分も真似をするようにベンチへと腰を掛けた。暫くすると搭乗開始のアナウンスがなり、一斉に人がゲートに向かって並び出し僕も負けずと並んだ。搭乗すると飛行機の狭さに少し動揺した。

バンクーバー空港に着くとホストマザーのミッシェルが車で迎えに来てくれ、ステイ先に向かう途中、見慣れない景色、大きな車に見惚れ、またもや偉大に感じた。家に着くとまず、日本の建物との違いに驚き、そしてカッコよかった。そして家の中に入ると、大きなリビング、キッチン、大きな庭、部屋、ベッドと全てに驚かされた。不思議なことに日本の様に自動販売機が道ばたはもちろん、屋外になく、屋内にしかないことも驚いた。通ったインターナショナル・スクールにもお菓子とジュースの販売機があった。

電車とバスは降りる駅を問わずに料金は統一してあり、電車は無人で動いており、駅にも駅員さんなどはいない。バスも電車と同じ切符を使うことができて、電車とバスを広い範囲で使い分ける事ができるので、ともて使い勝手がきいた。

朝はコンフレークやパンやパンケーキなどの甘いもので、お昼は学校にグミと紙パックジュースにサンドイッチを袋に入れて持って行った。週に一度、バーベキューでハンバーガーを作った。平日は学校に行き、放課後はステイ先のお兄さんのコールと毎日のようにバスケットボールをした。休みの日はホストファミリーと観光をしたり、学校で仲良くなった友達とショッピングなどをした。

いつもと違う生活を過ごしたことにより、いつもの生活が少し何時もと違う生活の仕方にかぶれた。もしかしたら、自分で意識して異なる二つの生活をかぶせさせたのかもしれない。違う生活は行ってすぐには出来ない。出来たと思う人は、その生活をビデオに撮り、あとで見返すといい。自分がいかに適当かわかるはずだ。少なくとも、自分は適当であった。もう一度行って経験したい。　I want to close to perfection.

2年ぶりの帰国で感じた日本の世相

飯島拓也

永住権受取の知らせ

長年の努力も叶って、ニュージランドの永住権を取得することが出来ました 。そして、2年ぶりに帰国し、感じたことが沢山ありますが、今回は就活についてコメントです。この時期、周りには就活で焦っている人が多いですが、一体なにを目標に仕事探しをしているのか、本当に自分がしたいことなのか、と思ってしまいます。この不景気な時代、やはり殆どの人が安定を求めるでしょう。ただ、誰でも出来る作業で一日中こき使われ同じ職場で定年を迎える。こんな人生が楽しいのか？自分のしたいことを職にできて定年を迎えられるのが望ましい。どうせこき使われるなら好きな仕事をしながらこき使われ方がいい、と私は思う。時代は変わってきていて、ただ大学卒で就職するよりまず自分がやりたいことを見つけ、そのための勉強をしたり専門学校へ行って知識を身に付け、就職して技術を身に付けるのが絶対よい。万が一、職場が無くなったり、首になっても技術があれば、その分野で次の職場が見つかりやすいし、経験があればもっと見つかりやすい。やりたいこと、目標があれば自然とまず何をしなきゃいけないか分かるし、人も知識も集まってくる。その中から次の目標に繋がる何かが見つかり、自分の引き出しを増やしてくれると思う。

長い人生、就職しておしまいではなく、就職したら次は何？その次はなにか？と常に目標を持って生きていくのが望ましいと思う。時に辛い事もあるだろうし、失敗することもあるだろうけど、人生そんなものじゃないかと思う。自分もいっぱい失敗し悔しい思いをしたけが、今は人生ってそういうものなんだな～、て納得して思える様になりました。

失敗を恐れず、失敗したら何がダメだったが分かる時点で、次の成功につながり勉強になる。失敗しなければ、失敗の理由も分からぬまま先に進んでしまい、長い人生を生きる上で得することが減ってしまうと思います。

MAPLE NEWS

2014年　Vol.72

三世代でNO More War

父親知らぬ祖母「かわいそう」戦没者追悼式

終戦記念日 最年少遺族７歳

最年少の遺族となった鹿児島県奄美市の小学2年生、福田鈴　ちゃん7歳は午前10時前、祖母の渡辺美佐子さん69歳（東京都世田谷区）、姉で5年生の仁香　ちゃん10歳とともに日本武道館に入った。参列する前「ひいおじいちゃんは一人寂しく死んでいった。戦争はしないで」と話した。

曽祖父の重岡秀彦さんは、勤めていた印刷会社の満州（現中国東北部）への移転で、１９４４年６月に単身で中国へ。その後、連絡が途絶えた。敗戦から数年後に突然、戦死公報が届いた。知らぬ間に徴兵され、46年1月に栄養失調と発疹チフスで戦病死したとされる。35歳だった。

渡辺さんは父の秀彦さんが満州へ渡った直後に生まれた。父の徴兵時期が敗戦間際の45年5月だったと聞かされた。

鈴ちゃんは、戦争と聞けば「つらいこと」と思うが、それ以上はよく分からない。陸上部で駆けっこに打ち込む生活と懸け離れているからだ。渡辺さんから追悼式に誘われても、気乗りがしなかった。

でも、その祖母は父と一度も会えなかったと聞くと、素直に「かわいそう」と感じる。最近、渡辺さんの勧めで戦争を描く絵本を読むようになった。

「もうちょっと大きくなったら、戦争の話を知りたい？」。鈴ちゃんは照れくさそうにうなずいた。

渡辺美佐子エリエール奨励賞受賞。同賞は難病や障がいをもつ小児と家族を対象として、社会医学的な角度から医療福祉の増進を図るために実践を行っている各方面の助成を受けにくい団体、個人に贈呈される。主催は日本児童家庭文化協会。大王製紙（株）が協賛

自費出版本

祖母の渡辺美佐子さん（左奥）の手を取り
全国戦没者追悼式に臨む福田鈴ちゃん
東京都千代田区の日本武道館にて

ENGLISH JAPANESE STUDIES
CANADIAN ACADEMY SETAGAYA
4-20-13-213 NOZAWA　SETAGAYA-KU, TOKYO, 154-0003, JAPAN　TEL:03-5712-3670
BRANCH:ENGLAND,CANADA,NEWZEALAND,USA　FAX:03-5712-3671